「結婚観尺度」の作成

竹原 健二^{1,2} 三砂ちづる^{2,3}

Development of a scale for attitude of marriage

Kenji TAKEHARA^{1,2} and Chizuru MISAGO^{2,3}

PURPOSE: The purpose of this study was to develop a scale for measuring view of marriage among young people and to examine the reliability and validity of the scale.

METHODS: A cross-sectional study using self-administrated questionnaire was conducted on February 2005 among 368 unmarried university students between the ages from 18 to 24 in Okinawa. The 25-items were developed via a literature study and in-depth interview university students.

RESULT: As a result of the factor analysis, 6 factors and 22-items; life enrichment through children (4-items), interest in marriage (4-items), happy family (3-items), sense of sacrifice and burden (5-items), marriage life contentment (3-items), independence (3-items) were extracted. It was shown that the Marriage-oriented scale was internally consistent from Cronbach's Alphas of .75. As for the validity, internal validity was supported as the score of sacrifice and burden correlated negatively with other 5 factors. The factor was constituted 5-items which meant negative attitude for marriage. The construct validity was supported as the score of ATM-scale and each factor correlated positively with 2 subjective criteria for marriage and the means of ATM-scale were significantly higher with 2 other criteria about attitude toward marriage.

CONCLUSIONS: These findings support that the ATM-scale has sufficient reliability and validity. It suggests the importance of evaluation from various aspects for the view of marriage.

Key words : marriage, declining birthrate, scale, reliability, validity

結婚, 少子化, 尺度, 信頼性, 妥当性

I 緒 言

わが国では若者の未婚化・晩婚化が急速に進行している(国立社会保障・人口問題研究所, 2005). その原因を明らかにするために, 若者の結婚に対

する価値観を把握することは急務である. 先行研究では, 性別と結婚願望や独身に留まっている理由, 属性と「結婚の条件」や「結婚の利点や欠点」といった二変量解析をおこなった研究(国立社会保障・人口問題研究所, 2003; 厚生労働省,

¹ 筑波大学大学院人間総合科学研究科

² 国立保健医療科学院疫学部

³ 津田塾大学学芸学部

¹University of Tsukuba Graduate School of Comprehensive Human Sciences

²Department of Epidemiology, National Institute of Public Health

³Faculty of Liberal Arts, Tsuda College

2004a), もしくは, 人口学的アプローチとして経済状況や学歴などの社会経済的要因を中心に分析をおこなった研究(駿河・西本, 2002; 彭ほか, 1999), 家族社会学などの社会学的アプローチによる研究はすでにいくつかおこなわれているが, 若者が「結婚したい」と思う背景にはどのような要因が存在するのかということは明らかにされていないとも言えない。若者の結婚に対する価値観を評価するための既存の心理尺度も見当たらなかった。海外の先行研究では若者の結婚に対する態度を測る既存尺度として2因子7項目から構成されているFAMS(Favorableness of attitudes toward marriage scale)があるが, その信頼性と妥当性はほとんど検討されていない(Salts et al., 1994)。

国内外を見ても, 若者の結婚に対する価値観(以後: 結婚観)を問うような尺度がないこともあり, わが国の先行研究では結婚観や結婚願望を問う際に, 「結婚したいと思いますか」, 「いずれは結婚するつもりがありますか」といった質問項目が単独で用いられることが多かった。しかし, 若者が「結婚をしたい/したくない」という考えに至った背景が十分に明らかにされていないことや, 結婚に対する意思決定には複数の要因が影響を及ぼしていると考えられていることから(伊東, 1997), 結婚観とは従来の研究のような単一の質問ではなく, より多面的に評価される必要があるのではないかと考えた。そこで, 本研究では若者の結婚観がどのような要因によって構成されているのかを把握するとともに, 今後の若者の結婚観や結婚行動に関する研究に役立てるために, 若者の結婚観を測定するための尺度(結婚観尺度)の作成, およびその信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

II 方 法

本研究に先立ち, 尺度を構成する概念の設定や質問項目の作成に役立てるためにRAP(Rapid Anthropological Assessment Procedure: 迅速な人類学的方法を用いた評価方法)を用いた質的調査をおこなった。RAPとは, アルマアタ宣言に基

づくPHC(Primary Health Care)の実施において生じた課題や効果を評価するために, 地域住民とケア提供者の声を聞くためのツールが求められ, そうしたニーズに応じて開発された方法である(三砂, 2001; Susan et al., 1987)。

合計特殊出生率(TFR: Total fertility rate)がもっとも高く, 平均初婚年齢(厚生労働省, 2004b)や生涯未婚率(国立社会保障・人口問題研究所, 2005)が全国よりも低い沖縄県の大学生9人(男性6人, 女性3人)と, TFRがもっとも低く, 平均初婚年齢や生涯未婚率が全国で2番目に高い東京都を含む関東地方の大学に通う大学生と大学院生5人(男性3人, 女性2人)の男女計14名を対象とし, 1対1の半構造化面接法を用いた。

質的調査で得られたデータについて要約的内容分析を用いてカテゴリー化し, 抽出されたカテゴリーで同質なものであると考えられたカテゴリーは一つにまとめた。データ分析を質的調査の対象者全員のデータを収集した後におこなったため, カテゴリーが理論的飽和へ達しているとは言えないが, 14名の対象者に対して質的調査をおこなうに連れ, 新たに得られる知見や概念はほとんどなくなった。

分析の結果, 結婚に対する価値観の背景として「結婚の条件」, 「決断するタイミング」, 「結婚の意味」, 「独身でいる理由」という4つのカテゴリーが抽出された。若者は周囲からの情報などを元に「結婚の条件」を考え, どのような結婚をしたいかを考えていることが示唆された。「決断するタイミング」からは自分の自由や目標などを踏まえて結婚する時期を想像していることがうかがわれた。「結婚の意味」については夫婦になることや, 家族を持つことであると考えていた。今はまだ学生であり, 経済的・精神的に自立をしてから結婚したいことや, 自分の自由を失いたくないことが「独身でいる理由」として抽出された。

先行研究では, 若者は結婚と子供(出産)を関連づけていた(彭ほか, 2001)。また, 独身者に対する調査(厚生労働省, 2004a)では, 若者は結婚の利点として「家族や子供が持てる」, 「好きな人と

一緒にいられる」、「社会的な信用が得られる」といった項目を挙げていた。独身の利点としては「行動や生き方が自由」という回答が全体の60%以上を占め(国立社会保障・人口問題研究所, 2003), 結婚に対して「拘束感」を感じていることが結婚に対する価値観に否定的に作用していると考えられた。

質的調査や先行研究の結果から、「家族」、「子供」、「パートナー」、「自立感」、「結婚への興味・関心」、「拘束感」の6つの要因を表すと考えられる質問項目を作成することを試みた。質問項目を作成する際には、質的調査で得たデータに含まれる文章や言葉を用いるとともに、疫学や母子保健、思春期の専門家や沖縄出身者を含む複数の若者の意見を参考にしながら精度の高い調査票の作成を目指した。

質的調査の結果から、関東の若者からは結婚に対して否定的な価値観が多く聞かれた。一方、沖縄の若者からは肯定的な価値観も多く聞かれた。本研究では若者の結婚観を測定する上で肯定的な側面と否定的な側面の両方を踏まえることが重要であると考えたため、両側面が得られると思われる沖縄で尺度作成のための調査を実施することとした。

1. 対象

対象者は沖縄県の2つの大学(国立大学1校、私立大学1校)に在籍している学生とし、調査協力に対する承諾が得られた先生の講義などに出席した399人の学生から回答を得た。その中から、18~24歳の大学生の男女で婚姻歴のない者を本研究の対象者とし、対象者の条件を満たした者368人(92.2%)を分析対象とした。

2. 質問項目

調査票は性別や年齢などの社会的属性、男女交際の経験や現在のパートナーの有無に関する項目と、リッカートスケールを用いた結婚に対する主観的基準を問う2項目、結婚に対する態度や考え方に関する2項目、前述の質的調査や先行研究の

結果から、結婚観を構成していると予想された6つの要因を構成する25項目(例:「家族団欒のある家庭を作れると思う」、「結婚をすると、自分のやりたいことが制限されてしまう」、「どうすれば結婚生活をより豊かにできるのかを考えることがある」など)により構成された。

3. データ収集

調査は対象者が所属する大学の様々な学部 of 学生が受講する授業の時間などに実施した。研究の目的、回答の自由やプライバシーの保護、調査への協力の自由などについて説明した後で、無記名自記式の調査票に回答してもらい、回答後は各自が調査票を封筒に入れ封をした上で提出してもらった。本研究では個別に調査協力に対する同意書は得ていないが、調査時に回答の自由などについて説明をしたため、対象者が調査票に回答し、提出したことにより調査協力の意思があると考えた。

4. 解析方法

まず単変量解析によって、それぞれの変数の分布などを把握した。次に結婚や出産などに対する価値観を測る質問項目の分布を考慮した上で因子分析をおこなった。抽出された因子の構造を相関係数によって把握した。尺度の信頼性の検討はCronbachの α 係数により、妥当性の検討は結婚観尺度の得点と、リッカートスケールを用いた結婚に対する主観的態度との相関や、結婚に対する態度や考えに関する項目による尺度得点の平均値の比較によりおこなった。なお、本研究でおこなった統計解析にはSPSS12.0J for Windowsを使用した。

III 結 果

1. 対象者の属性

対象者の性別は男性が53.7%, 女性が46.4%であった。また、沖縄出身者が69.8%, 男女交際の経験がある者が75.0%, 平均年齢は20.4歳, 平均兄弟数(対象者自身も含む)は2.84人であった(表

表1 対象者の属性

	男性		女性		合計	
	n	%	n	%	n	%
所属						
A 大学	133	(67.5)	114	(66.7)	247	(67.1)
B 大学	64	(32.5)	57	(33.3)	121	(32.9)
出身地域						
沖縄県	127	(64.5)	130	(76.0)	257	(69.8)
その他	70	(35.5)	41	(24.0)	111	(30.2)
男女交際						
交際経験なし	46	(24.3)	41	(25.8)	87	(25.0)
交際経験あり	143	(75.7)	118	(74.2)	261	(75.0)
進路希望						
就職希望・既定	114	(57.9)	110	(65.5)	224	(61.4)
進学希望・既定	39	(19.8)	27	(16.1)	66	(18.1)
決めていない	44	(22.3)	31	(18.5)	75	(20.5)
所属学部						
文系学部	99	(50.3)	102	(59.6)	201	(54.6)
理系学部	79	(40.1)	60	(35.1)	139	(37.8)
どちらとも言えない	19	(9.6)	9	(5.3)	28	(7.6)
年齢						
Mean	20.41		20.46		20.43	
兄弟数 (自分も含む)						
Mean	2.84		2.84		2.84	

N = 368

1).

2. 結婚観の因子構造

結婚や出産に対する価値観に関する 25 項目それぞれについて分布を把握したところ、多変量正規性が確保されなかったため、因子抽出法には主因子法を採用することとした。次に結婚観を構成する要因間には相関関係があると考えられるため、斜交回転（プロマックス回転）を用いた因子分析をおこなった。因子数は調査項目の作成時からの仮定に加え、固有値およびスクリープロットも考慮した上で 6 因子構造が適当であると判断した。次に、構成概念妥当性を考慮するために因子負荷の絶対値が 0.40 未満の項目を除外した。最終的に 6 因子 22 項目が抽出された。

各因子を構成する質問項目の特徴から、第 1 因子を「子供がもたらす豊かさ (4 項目)」, 第 2 因子を「結婚への興味 (4 項目)」, 第 3 因子を「温かい

家庭 (3 項目)」, 第 4 因子を「犠牲・負担感 (5 項目)」, 第 5 因子を「結婚生活の充実 (3 項目)」, 第 6 因子を「自立感 (3 項目)」と命名した (表 2)。

抽出された 22 項目における対象者の回答には合計 14 個の欠損値があった。欠損値のある対象者を除いて因子分析をおこなっても、因子構造に大きな違いが見られなかった。そのため、各因子の合計得点を算出する際には、欠損値は系列平均に置き換えた上で、因子を構成する質問項目の得点を単純加算した。

各因子の合計得点は正規性が認められなかったため、各因子間の因子構造については Spearman の順位相関係数を用いて求めた。「①子供がもたらす豊かさ」, 「②結婚への興味」, 「③温かい家庭」, 「⑤結婚生活の充実」の 4 因子は互いに弱から中程度の正の相関関係が見られ、「④犠牲・負担感」は「①子供がもたらす豊かさ」, 「②結婚への興味」, 「③温かい家庭」, 「⑤結婚生活の充実」と弱い負の

表2 結婚観尺度の因子分析結果

質問項目 (22項目) $\alpha = 0.75$	第1因子 $\alpha = 0.80$	第2因子 $\alpha = 0.80$	第3因子 $\alpha = 0.83$	第4因子 $\alpha = 0.68$	第5因子 $\alpha = 0.62$	第6因子 $\alpha = 0.56$
第1因子：子供がもたらす豊かさ						
子どもは自分にとってかけがえのない宝になると思う	0.82	0.06	0.06	- 0.01	- 0.16	- 0.65
子どもを育てることによって、自分も高められる	0.71	0.05	- 0.01	0.03	0.02	0.03
子どものためになるならば、なんでもしてあげたい	0.57	0.14	0.03	0.06	0.01	0.03
子どもは生活を豊かにしてくれると思う	0.57	- 0.01	0.01	- 0.06	0.13	0.01
第2因子：結婚への興味						
結婚や結婚生活に役立ちそうな情報には注目する	0.16	0.70	- 0.08	- 0.02	- 0.07	- 0.05
どうすれば結婚生活をより豊かに出来るのかを考えることがある	0.08	0.69	- 0.06	- 0.01	0.06	0.13
結婚は自分にとって重要な問題なので、真剣に考えている	- 0.11	0.63	0.07	0.02	0.29	- 0.01
自分の結婚・結婚生活には大変興味を持っている	0.14	0.50	- 0.01	- 0.01	0.27	- 0.03
第3因子：温かい家庭						
今すぐにでも家に帰りたくなるような家庭を作れると思う	- 0.04	- 0.02	0.82	0.01	0.02	- 0.02
何でも言えて、相談できるような家族関係を作れると思う	0.08	- 0.10	0.80	0.01	- 0.03	0.06
家族団欒（だんらん）のある家庭を作れると思う	0.14	- 0.02	0.67	- 0.04	0.06	- 0.01
第4因子：犠牲・負担感						
結婚は何かを犠牲にすることだと思う	0.01	- 0.06	- 0.07	0.67	- 0.01	0.05
結婚したら、自分の人間の器が大きくなるチャンスを失ってしまいそうだと思う	- 0.13	0.22	0.12	0.63	- 0.15	- 0.02
結婚をすると、自分のやりたいことが制限されてしまう	- 0.24	- 0.10	0.02	0.55	0.18	- 0.03
今は自分のために時間を使いたい	0.16	- 0.21	- 0.07	0.49	0.13	0.01
家族のために忙しくなるような生活はしたくない	0.02	0.09	0.01	0.46	- 0.22	0.03
第5因子：結婚生活の充実						
結婚したら、結婚生活を充実したものにしたと思う	0.02	0.09	0.04	- 0.02	0.67	- 0.04
自分を理解してくれる人が身近にいてほしい	- 0.01	0.09	- 0.01	0.00	0.47	- 0.09
好きな人と一緒に生活したい	- 0.08	0.28	0.01	0.02	0.46	0.06
第6因子：自立感						
自分は結婚するには十分くらい精神的に大人であると思う	0.02	0.15	- 0.02	0.01	- 0.11	0.67
いざとなれば、すぐにでも経済的に自立した生活ができる能力があると思う	- 0.12	0.10	0.08	- 0.06	- 0.17	0.53
自分のことは自分で判断・実行することができる	0.11	- 0.29	- 0.02	0.04	0.20	0.48

因子抽出法：主因子法，回転法：プロマックス回転

相関関係が認められた。「⑥自立感」は「③温かい家庭」と弱い正の相関が認められた（表3）。

因子構造について得られた結果から、尺度全体の得点（尺度得点）は「④犠牲・負担感」因子の5項目を逆転項目として扱った上で各因子得点を単純加算した。尺度得点は正規分布が認められた。

3. 信頼性の検討

尺度および各因子の内的整合性を検討するために Cronbach の α 係数を用いた。尺度全体の信頼性係数は 0.73 であり、それぞれの因子においては

「①子供がもたらす豊かさ」($\alpha=0.80$)、「②結婚への興味」($\alpha=0.80$)、「③温かい家庭」($\alpha=0.83$)、「④犠牲・負担感」($\alpha=0.68$)、「⑤結婚生活の充実」($\alpha=0.62$)、「⑥自立感」($\alpha=0.56$)であった。よって、尺度を構成する質問項目が内的整合性を持つことが認められた。

4. 妥当性の検討

尺度の構成概念妥当性を検討するために、現在の結婚願望に関する質問（5件法）、現在の交際相手と結婚願望に関する質問（4件法）により求めた

表3 各因子得点の相関係数

	子供がもたらす豊かさ	結婚への興味	温かい家庭	犠牲・負担感	結婚生活の充実	自立感
子供がもたらす豊かさ因子		0.47 ***	0.51 ***	- 0.13*	0.41 ***	0.03
結婚への興味			0.39 ***	- 0.14 **	0.40 ***	0.08
温かい家庭因子				- 0.20 ***	0.32 ***	0.23 ***
犠牲・負担感因子					- 0.11*	- 0.03
結婚生活の充実						- 0.01
自立感						

表中の数値は Spearman の順位相関係数, *** : $p < 0.001$, ** : $p < 0.01$, * : $p < 0.05$

表4 因子・尺度得点と結婚に関する主観的基準

	子供がもたらす豊かさ		結婚への興味		温かい家庭		犠牲・負担感		結婚生活の充実		自立感		尺度得点 (5 因子)		尺度得点 (6 因子)	
	r	p	r	p	r	p	r	p	r	p	r	p	r	p	r	p
今の恋人と結婚したいと思うか	0.25	0.004	0.47	< 0.001	0.25	0.004	- 0.25	0.005	0.31	< 0.001	0.11	0.21	0.43	< 0.001	0.45	< 0.001
現在の結婚願望	0.22	< 0.001	0.39	< 0.001	0.25	< 0.001	- 0.27	< 0.001	0.2	< 0.001	0.005	0.15	0.41	< 0.001	0.43	< 0.001

r : Spearman の順位相関係数

※主観的基準は結婚願望が弱い…1, 強い…5

※尺度得点 (5 因子) とは「自立感」因子を除いた5つの因子の得点

主観的な基準と各因子の合計得点について、Spearman の順位相関係数を求めた。それぞれの主観的な基準は尺度得点と中程度の正の相関が認められ、「①子供がもたらす豊かさ」、「②結婚への興味」、「③温かい家庭」、「⑤結婚生活の充実」と弱から中程度の正の相関が見られ、「④犠牲・負担感」とは負の弱い相関が認められた。現在の結婚願望においてはさらに、「⑥自立感」と弱い正の相関が見られた (表4)。

結婚に対する態度や考えを表す2項目について、「はい/いいえ」の二値変数を用いて2群に分け、尺度得点および各因子得点の平均値の差の検定をおこなった。「いずれは結婚するつもりがある」と考えている者は「一生結婚しない」と考えている者に比べて、尺度得点および、「①子供がもたらす豊かさ」、「②結婚への興味」、「③温かい家庭」、「⑤結婚生活の充実」、「⑥自立感」の平均得点が有意に高く、「④犠牲・負担感」は差が見られなかった。「結婚することには利点がある」と回答した者は、「利点がない」と回答した者に比べて、尺度得点お

よび、「①子供がもたらす豊かさ」、「⑤結婚生活の充実」の平均点が有意に高かった (表5)。これらのことから本尺度の構成概念妥当性が認められた。

IV 考 察

1. 尺度の因子構造について

若者の結婚観尺度は因子を構成する質問項目の内容や因子間の相関関係より、「①子供がもたらす豊かさ」、「②結婚への興味」、「③温かい家庭」、「⑤結婚生活の充実」、という4つの肯定的な因子と、「④犠牲・負担感」という否定的な1因子、「⑥自立感」という肯定的ではあるものの、やや中立的な1因子という因子構造であると考えられた。

「①子供がもたらす豊かさ」因子は、自分自身の成長につながったり、日々の生活が豊かになったりするという子供を育てることによる利点や、子供に無償の愛を提供したいという考えを持っていることを表していると考えられる。

「②結婚への興味」因子は、結婚生活について日

表5 因子・尺度得点と結婚に対する態度や考えの関連

	n	子供がもたら す豊かさ ^a		結婚生活の 充実 ^a		温かい 家庭 ^a		犠牲・ 負担感 ^a		結婚生活の 充実 ^a		自立感 ^a		尺度得点 (5 因子) ^b		尺度得点 (6 因子) ^b	
		順位	p	順位	p	順位	p	順位	p	順位	p	順位	p	得点	p	得点	p
いずれは結婚する																	
はい	333	183.4	0.001	184.2	< 0.001	181.5	0.036	178.4	0.969	183.8	< 0.001	181.4	0.043	67.1	< 0.001	75.1	< 0.001
いいえ	23	107.6		96.7		135.4		179.3		102.0		137.0		57.4		64.6	
結婚することに利点がある																	
はい	340	182.4	0.005	180.5	0.210	179.4	0.736	177.4	0.183	182.4	0.005	178.9	0.935	66.7	0.044	74.7	0.002
いいえ	17	110.4		148.5		170.9		211.4		110.7		181.0		58.8		67.0	

^a : Mann-Whitney test, ^b : t-test

※尺度得点 (5 因子) とは「自立感」因子を除いた 5 つの因子の得点

常的に考えたり、役立ちそうな情報に対して関心を示したりするといった、結婚に対する気持ち準備や知識の獲得に関する考えを表したものであると考えられる。

「③温かい家庭」因子は、信頼し合える家族関係や家庭を形成することに対する効力感を表したものである。このことは結婚したらより良い家庭や家族関係を作っていきたいという意思表示であるとともに、温かい家庭環境に対する憧れでもあると考えられる。

「④犠牲・負担感」因子は、結婚をすることによって、自分の自由が失われたり、自己成長が抑制されたりするという考えを表したものである。結婚による自由の喪失を忌避するために若者が未婚を選択するのではないかと考えられており (伊東, 1997), 先行研究 (国立社会保障・人口問題研究所, 2003) における独身にとどまっている理由としても 18~24 歳では「仕事に打ち込みたい」が約 40%, 「自由や気楽さを失いたくない」が約 25% となっており、犠牲・負担感は若者の結婚行動を抑制していると考えられる。

「⑤結婚生活の充実」因子は、パートナーとの生活や相互理解について考え、いかに結婚生活をパートナーとともに充実かつ安らげるものにしていくかということを示すものであると考えられる。

「⑥自立感」因子は、自分自身は結婚をするのに十分な経済的、精神的に自立ができているかどうかを問う項目から構成されている。因子を構成し

ている項目や他の因子との関係性から、若者は精神的・経済的な自立は結婚をする上で重要なことだと考えているが、自立したからといって、すぐに結婚したくなるとは限らないという若者の複雑な心境を表していると考えられる。

2. 尺度の妥当性

本研究では結婚に対する主観的態度との相関関係、平均値の差の検定によるという 2 つの異なる側面から尺度の妥当性の検討をおこなった。

尺度得点と結婚に対する主観的態度との相関関係では現時点における結婚願望、および今のパートナーとの将来的な結婚願望という 2 つの異なる主観的基準を用いた。ともに尺度得点とは中程度の正の相関を示した。また、結婚に対する態度や考えの違いによる尺度得点の平均値の差を検討し、結婚に対して否定的な群の方が尺度得点の平均が有意に低かった。これらのことから、本尺度の構成概念妥当性が確認された。

3. 本尺度の限界と可能性

本研究では男女一緒に分析をおこなった。それに先立ち男女別に因子分析を試みたところ、男女それぞれの因子構造には若干の違いが見られた。しかし、抽出された因子や項目に大きな相違点がなかったことや、作成された尺度の今後の調査・研究における活用しやすさを考慮し、男女共通の尺度の作成を目指した。

因子分析によって 6 つの因子が抽出されたが、

因子間の相関係数を求めたところ、「⑥自立感」因子は「③温かい家庭」因子を除く4つの因子とは相関関係が認められなかった。また、統計的に有意ではなかったが、「⑤結婚生活の充実」因子と負の相関係数が算出された。さらに、因子における α 係数も0.56と低い値を示したため、本尺度に「⑥自立感」因子を含めるべきか検討した。「⑥自立感」を除いた5因子構造の尺度得点を算出し、6因子構造の本尺度の尺度得点と信頼性と妥当性に関する項目について比較した。Cronbachの α 係数は5因子構造で $\alpha=0.77$ 、6因子構造で $\alpha=0.75$ であった。主観的な基準との相関関係、および平均値の差の検定のいずれにおいても大きな差が見られなかったことから(表4、表5)、「⑥自立感」因子を尺度に加えることは信頼性と妥当性を損ねることにはつながらないと考えられた。質的研究や先行研究から、若者の自立感は結婚観に影響を与える要因の一つであると考えられたため、本尺度は「⑥自立感」因子を含めた6因子構造の尺度が妥当であると考えた。

本研究は未婚者を対象とした横断研究であり、尺度の予測妥当性については検討していない。そこで、本尺度による結婚観の測定をベースラインとするようなコホート研究の実施が望まれる。

沖縄県というわが国でも独特な文化が残されている地域が選ばれ、対象者は大学生に限定されているため、本研究で得られた結果が外的妥当性を十分に有していない可能性は否定できない。本尺度が同年代のすべての若者に適用できる可能性を証明するためにも、今後は他の地域や対象集団における調査の実施によって本尺度のデータが蓄積されることが望まれる。

外国でおこなわれた研究では両親の結婚を不幸なものとして認識したり、両親の離婚を経験したりすることは若者の結婚観に対して否定的に作用することが明らかにされている(Gabardi and Rosen, 1992; Kinnaird and Garrard, 1986)。これらの研究によって若者の結婚観に対する否定的な要因は明らかにされているものの、肯定的な要因はほとんど明らかにされていない。わが国でも同様に若

者の結婚観に対して肯定的に作用するような要因はほとんど明らかにされておらず、若者の結婚観に関する研究は不足していると考えられる。若者の結婚観に関して研究が行われてきたにも関わらず、1975年以降男女ともに未婚率が上昇し続けていることから(総務省, 2000)、若者の結婚観を従来のような単一の質問で評価する方法には限界があるのではないと思われる。

本研究により開発された尺度は6つの因子から構成されており、若者の結婚観を多面的に測定することに適している。本尺度が若者の結婚観に肯定的な影響を与える要因を明らかにするための研究などに広く活用され、少子化対策の一助となることを期待する。

V 結 論

結婚観尺度は結婚に対する肯定的な因子と否定的な因子を含む6つの因子から構成されており、尺度としての信頼性と妥当性が確認された。本研究の結果から、若者の結婚観を測定する際には単一の質問を用いるのではなく、多面的に評価される必要があることが示唆された。

謝辞

本研究にご協力くださいました対象者の皆様、インタビューおよび質問紙調査の実施の際にご協力いただきました各大学の関係者の皆様に心より感謝いたします。また、沖縄での調査全般を助けてくださいました琉球大学の小川寿美子先生に御礼申し上げます。

文 献

- Gabardi L and Rosen L (1992): Intimate relationships: College students from divorced and intact families, *Journal of Divorce & Remarriage*, 18, 25-56
- 彭 潤希, 佐藤龍三郎, 武藤孝司(1999): 未婚女性の結婚・出産に対する阻害要因, *順天堂医学*, 44(4), 423-433
- 彭 潤希, 佐藤龍三郎, 福渡 靖(2001): 未婚女性の結婚・出産・育児・介護および就業に関する意識, *厚生*の指標, 48 (1), 26-32
- 伊東秀章(1997): 未婚化に影響する心理学的諸要因, *社会心理学研究*, 12 (3), 163-171

- Kinnaird K and Gerrrd M (1986): Premarital sexual behavior and attitudes toward marriage and divorce among young women as a function of their mother's marital status, *Journal of Marriage and the Family*, 48, 757-765
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2005): 人口統計資料集—2005年版—
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2003): 第12回出生動向基本調査 (結婚と出産に関する全国調査)—独身者調査の結果概要—
- 厚生労働省 (2004a): 厚生労働省雇用均等・児童家庭局委託調査「少子化に関する意識調査研究」
- 厚生労働省 (2004b): 平成16年人口動態統計月報年計 (概数)
- 三砂ちづる (2001): RAPの解説と適用, 平野かよ子, 尾崎米厚編, 事例から学ぶ保健活動の評価, 138-145, 医学書院 (東京)
- Salts CJ, Seismore MD, Lindholm BW et al. (1994): Attitudes toward marriage and premarital sexual activity of college freshmen, *Adolescence*, 29 (116), 775-779
- Susan CM and Elena H (1987): Rapid assessment procedures for nutrition and primary health care, Tokyo and UCLA Latin American Center Publications University of Clifornia, Los Angeles
- 総務省統計局 (2000): 国勢調査
- 駿河輝和, 西本真弓 (2002): 育児支援策が出生行動に与える影響, 季刊・社会保障研究, 37(4), 371-379 (受稿 2006.1.20; 受理 2006.9.29)
-